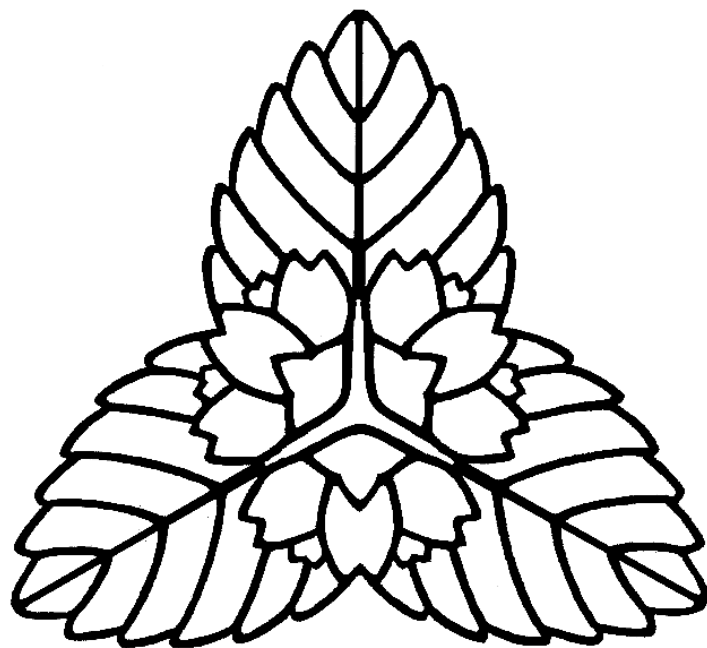


平成 28 年度 学校評価



広島県立海田高等学校

目 次

様式 5 - 1 -

様式 6 - 5 -

様式 8 - 10 -

平成28年度学校経営計画(年度末評価)

校番	13	学校名	広島県立海田高等学校	校長氏名	溝上 健文	全日制	本校
----	----	-----	------------	------	-------	-----	----

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
1 高い目標に挑戦し、夢の実現をあきらめない生徒～生徒の学力を高め、進路目標の達成を組織的に支援する学校							
学力が向上し、進路目標を達成している	現役生普通科国公立大学合格数 (広島大学合格者数)	62人 (11)	80人 (15)	59人 (9)	C	進路意識向上について個人差があり、成績上位層の増加につながらなかった。	進路指導 3学年
	・2年偏差値平均 50 以上の人数(2月) ・1年偏差値平均 50 以上の人数(1月)	116人 150人	140人 140人	103人 154人	B	過去問学習などにより、模試に対する意識が高まりつつある。	進路指導 2学年 1学年
自らが進んで力を付けようと努力している	・1級3種目合格者数 ・1級3種目受験者数	33人 51人	35人 60人	53人 69人	A	目標を大きく超えたため。	家政科
	1日当たりの平均家庭学習時間(2年・1年)	133分 132分	180分 150分	153分 137分	B	追跡調査により徐々に上昇しているが、目標値には達していない。	進路指導 2学年 1学年
常に資質・能力の向上を図り、授業の工夫・改善を図っている	4段階評定尺度法による授業評価平均	3.17	3.3	3.26	A	目標に達した	
	校内相互授業観察回数	2.95回	3.5回	3.4回	B	概ね目標に達したため	
学びの変革が推進され、生徒の意識・行動が変容している	これまで学習したことの中で、もっと学びたいことがあると回答する生徒の割合	64.4%	70.0%	60.2%	C	「わくわく感」を抱かせる取組が少ない	教務 教育研究 各教科
	授業は、ペア・グループ等で互いに考えを伝え合いながら学習する方がよくなるかと回答する生徒の割合	61.1%	66.7%	61.7%	B	授業の工夫・改善は意識づけられている	
<p>【評価結果の分析】</p> <p>進路指導部</p> <p>1・2年生については、目標値には達していないが、丁寧な時間調査により家庭学習時間は増えている。しかし、学習面での主体性が十分に育っていないので、模試結果上昇に結びついていない。3年生については、予備校講師講演会などの参加者も多く、進路に向けての意識は高まっていたが、個人差があり、成績上位層の増加に繋がっていない。また、早期に苦手分野・科目の克服や復習に取りかかれていないことや受験へのスタートが遅れていることが、成績の伸び悩みに繋がっている。</p> <p>出願時の判定値は、前期AB判定 40人、C判定 19人、中・後期 AB判定 11人、C判定 3人 推薦合格 4人。前期試験までに広島大学9人、難関大学について筑波1人、九州大学既卒1名、県立広島大学15人、広島市立大学5人、国公立大学計59名が合格。</p> <p>第1学年</p> <p>模試の平均点偏差値の推移は、7月52.2 11月52.4 1月52.0、偏差値50以上の生徒数は7月165 11月157 1月154人と若干減少しているものの、いずれも過去5年間の最高値である。また偏差値58以上の層も過去5年で最高、逆に50未満の層の人数は過去最低である。</p> <p>学習時間平均は1学期末144分 3学期末137分と減少した。また目標値の150分を超えている生徒数は116人で、全体の1/3程度である、120分未満の生徒数は115人で全体の約1/3である。</p> <p>学期に1～2回担任による個別指導を行い、学習法や苦手分野の克服の仕方など個別指導に取り組んだ。</p> <p>第2学年</p> <p>2月回の3年間の過年度比較では、国数英50以上の人数は114 116 103、5教科50以上の人数も106 96 78とここ3年で最もよくない。1年間の偏差値推移では、昨年度の1月51.7 7月50.7 11月49.7と下降していたが、1月49.7 2月50.0と底打ち感がある。5教科総合は、47.0 47.6 47.9と若干上昇傾向にあり、50以上の生徒数が58 64 72と増加傾向にあることも符合している。</p> <p>学習時間平均は1年次132分 2年次153分と、わずかではあるが増加した。目標の180分以上を達成している生徒は76名で全体の25%である一方で、未だに2時間以下の生徒も68名いる。1年次の151名に比べると半数以下まで減少したが、これらの生徒を学習に向かわせるための方策が必要である。</p> <p>各学期に最低2回の担任による個人面談と1・2学期に各1回の教科担任面接を実施し、生徒個々への指導の充実を図った。さらに2学期からは放課後補習も実施し、受験に向けて学習意識の高揚を図った。</p>							

家政科

食物調理1級及び被服製作和服1級の受験者数が増加した。また、生徒が合格に向けて意欲的に取り組んだ結果、過去最高の合格者で三冠王取得者数日本一を達成した。

教育研究部

授業評価について、昨年度は1学期に比して2学期は数値が低下したが、今年度は2年普通科、3年普通科で上昇した。昨年度の2学期と比較すると一部を除いて数値が上昇していた。学びの変革に向けた日頃の授業改善の効果が現れたと思われる。

校内相互授業観察について、通常の期間・管理職の授業観察期間や研究授業等、年中参加を呼びかけ、概ね目標に達した。

その他

職員アンケートの肯定的回答が、「4月当初と比べて、主体的に学ぶ生徒が増えたと感じる」(58.5%)、「4月当初と比べて、生徒の挑戦する意識は向上したと感じる」(52.8%)、「私は「学びの変革」を意識して授業づくりに取り組んでいる」(79.2%)と、取組は浸透しつつあるが、生徒の行動変容に至る段階までには至っておらず依然課題が残されている。

【今後の改善方策】

進路指導部

全学年共通して、授業を中心に据え、予習 授業 復習サイクルの定着化を一層図る。また、各種課題や小テストを実施することが、学力につながるように工夫しなければならない。課題は提出することを踏まえ、小テストは「追試にならないため」という後向きな姿勢で臨むのではなく、その意義を理解させ、前向きに自発的に取り組ませることによって、主体的な学習時間が増えるように指導する。また、全体への課題以外に成績上位層に対しては、別課題などを課すことで上位層の意識を高める工夫をする。学習面で、苦戦している生徒には、学習方法の提示・教材の紹介など、より具体的なアドバイスをする。そして、早期にスタートを切らせるように、全体で指導をする。

教務部

授業の工夫・改善の他に、次のような取組によって生徒の知的好奇心を喚起することで、学習意欲の向上につなげていく。

- ・総合的な学習の時間について、社会的な問題をテーマとする内容などを取り入れる。
- ・読書の時間を定期的に設ける。

第1学年

学習習慣確立に向けて、予習・授業・復習、課題や小テスト、模擬試験などに積極的に取り組むよう授業やホームルーム、学年集会などあらゆる場面を捉えての指導を継続していく。担任面談等を通じて、個々の生徒に応じた学習課題や具体的な目標設定および学習計画をサポートしていく。

第2学年

毎日の学習サイクルの定着に向けて、各教科からの予習・復習への働きかけを充実させるとともに、担任面接等を通じて、個々に応じた具体的な目標設定・学習計画作りをサポートする。その際、模試を区切りの目標として取り組めるよう、時期や出題範囲・傾向などの生徒への提示を早め、計画的な模試対策に取り組めるよう各教科と連携する。また、昨年度からの課題である得意科目の克服に向けて、春期学習セミナーでの質問教室の開設、希望者教科面接の実施・充実等を通じて、生徒への具体的な学習方法や教材の提示を行い、わかる楽しさを実感させるよう取り組む。また、様々な場面で、最後まで諦めず、協力・協働して取り組める生徒の育成をめざし、時間やルールを守る等、仲間づくりや基本的な生活習慣を確立させる指導を継続する。

教育研究部

授業評価について、結果を教科主任会議で分析し、低かった評価項目(家庭学習・興味関心)の改善に向けて取組を継続する。

相互授業観察について、引き続き機会あるごとに相互観察を呼びかけ、授業をお互いに見合う雰囲気醸成し、学びの変革を進めていく。

2 自律した行動を取り、他者と協働できる生徒～社会で生き抜くために必要な資質・態度を育成する学校

自ら進んで挨拶することができる	年度当初と比して自ら進んで挨拶をする生徒が増えたと回答する教職員の割合	新規	80.0%	62.3%	C	「よく」が13.2%、「概ね」が49.1%	生徒指導
心身の自己管理をすることができる	年間遅刻者総数	894人	500人	804人	C	1年 222人 2年 246人 3年 256人	生徒指導
一人一人の生徒に応じた相談体制が確立されている	特別支援教育に係る連絡会議の開催回数	6回	6回	6回	A	計画的に支援の内容、方法について検討し取り組んだ。	保健相談
課外の活動に積極的に参加している	部活動加入割合	75.2%	78.0%	72.8%	B	運動部 465人 文化部 231人	生徒指導
グローバル社会を視野に入れた行動ができる	将来、留学したい又は海外で働きたいと考える生徒の割合	30.3%	40.0%	32.6%	B	概ね目標に達した	教育研究

【評価結果の分析】

保健・相談部

特別支援が必要な生徒について、計画的に関係者会議を開き、生徒の状況をもとに、支援の内容や方法について協議した。また、保護者と生徒の現状について、状況を共有することで、必要な支援について連携を取りながら進めることができた。

教育研究部

グローバル人材育成について、昨年度よりはやや改善したが、高い数字とは言えない。生徒の内向き志向には強いものがある。広報・周知の活動がトビタテJAPANに2人応募し1次審査を突破、未来探究塾に1名参加、海田町海外交流事業に5名参加など行動に結びついた。

生徒指導部
 挨拶に関しては、年度当初に掲げた「いつでも・どこでも・誰に対しても・自分から挨拶することができる」という積極的な挨拶ができる生徒がまだまだ少ないのが現状である。校内で活発な挨拶が飛び交う環境が普通だと思えるくらい浸透させることが必要である。
 遅刻数は、2学期途中で目標としていた500回を超えてしまった。昨年と比較し、特定の生徒が何度も遅刻するケースは少なくなったが、安易な理由での遅刻が多く、生徒指導部のみではなく学校全体としての取組が必要である。
 部活動加入率は、少し低下した。オープンスクールや新入生向けの部活動紹介で各部が高校生活における部活動の意義や魅力を伝えることが必要である。
 その他
 職員アンケートの肯定的回答が、「4月当初と比べて、生徒の自律性は向上したと感じる」(77.4%)、「4月当初と比べて、生徒の協働する態度は改善したと感じる」(77.4%)「4月当初と比べて、生徒の時間を守るという意識は改善したと感じる」(75.5%)、「4月当初と比べて、進んで挨拶する生徒の数は増えたと感じる」(62.3%)であった。

【今後の改善方策】
 教育研究部
 グローバル人材育成について 公私問わず留学等の案内は、基本的に全て生徒に案内する。順調な姉妹校交流、組織を通じた留学生の受入れの取組を継続し、奨学金付の留学の希望者も増加傾向にあるので取組みを継続する。
 生徒指導部
 挨拶・遅刻に関しては、全校集会や日常生活の中で継続的に意識向上に向けた働きかけを全職員で行っていく。部活動に関しては、新入生のオリエンテーションを工夫することが挙げられる。

3 成長する組織として研修を重ね、地域から信頼される開かれた学校

教育活動の様子が丁寧に広報されている	ホームページの更新回数	20回	24回	35回	A	写真などを豊富に使用して随時更新に努めた	総務
中学生の関心が高く、学びたい学校になっている	入学者選抜の志願倍率(普通科 選抜 ・)	2.04倍 1.44倍	2.0倍 1.5倍	2.56倍 1.29倍	B	選抜 において前年を上回った。	各部
	(家政科 選抜 ・)	1.50倍 1.28倍	2.0倍 1.5倍	1.60倍 1.25倍			
	オープンスクール等の参加者数	1,818人	1,400人	1,607人	A	目標に達した	教育研究
学校運営に組織的に取り組んでいる	職員研修会の開催回数	8回	10回	13回	A	組織的、計画的に実施する体制は整っている。	各部
	学校経営目標の達成に向け、取組の立案等に教職員も参画していると回答する教職員の割合	81.7%	90.0%	77.6%	B	ルーティンな業務は組織として円滑に行われている。	

【評価結果の分析】
 教育研究部
 オープンスクール等の参加者数について、今年は時期が変則的であったが、幸い多くの参加者を得た。学校説明会は、対象を教員・塾関係者に限った開催であったが内容は充実していた。
 その他
 選抜 において不合格になった生徒の90%以上が選抜 を受検し、志願の強さがうかがえる。
 職員アンケートの肯定的回答が、「私は、学校経営目標を自覚して、各種業務を遂行している」(90.6%)と、組織的な目標達成のため、個々の取組を行っていることが分かる。

【今後の改善方策】
 その他
 11月に行った入学者選抜説明会の参加者は、中学校6校、学習塾10名であった。入学者選抜内容の大きな変更もなく、ニーズはなかったものと考えられる。オープンスクールの開催を1回だけにしたことについての中学校関係者からの意見もなかったことから、次年度の11月期の開催については、実施の有無を含めて検討が必要である。
 想定中学校卒業生数3%増の状況において、選抜Ⅱの志願者数を減少させたことについては、分析が必要である。周辺では選抜が難化しているという印象を持たれており、生徒募集において工夫・改善が必要である。
 第2回業務改善アンケートにおいて、前年度比が「充実感」-9.5%、「協働」-6.2%、「参画」-4.7%、「業務改善」-15.5%と大きく減じている。第3回の結果を待って、次年度の業務改善計画を検討する。

学校経営目標		
達成目標	本年度行動計画	担当部等
1 高い目標に挑戦し、夢の実現をあきらめない生徒～生徒の学力を高め、進路目標の達成を組織的に支援する学校		
学力が向上し、進路目標を達成している	<ul style="list-style-type: none"> 【 A 】各学年の初期指導を充実する。 【 B 】個人面談・学年集会を通して学習する集団としての自覚を高める。 【 C 】講師を招聘し教員対象研修会を開催する。 【 C 】各学年の進路検討会議の精度を上げる。 	進路指導 3 学年
	<ul style="list-style-type: none"> 【 B 】模試分析を教科主任会議で行い、教科会で対策を検討し、授業改善につなげる。 【 B 】授業力を向上させ、授業満足度等数値指標を上げる。 【 C 】 F I N E システムを活用し教科担当者等による面談を行う。 【 B 】個人面談の時間を確保する。 	進路指導 2 学年 1 学年
自らが進んで力を付けようと努力している	<ul style="list-style-type: none"> 【 A 】基礎・基本となる知識と技能を定着させる。 【 A 】全国高等学校家庭科技術検定和服 1 級、洋 1 服、食物調理 1 級の受験意欲を高める指導を行う。 【 A 】専門的な知識・技術を活用し、地域に貢献する行事を行う。 	家政科
	<ul style="list-style-type: none"> 【 B 】自主学習時間プランの活用し、個人面談を行って、学習時間を増加させる。 【 C 】課題発見、問題解決学習を取り入れる。 	進路指導 2 学年 1 学年
常に資質・能力の向上を図り、授業の工夫・改善を図っている	<ul style="list-style-type: none"> 【 B 】教科主任会議を充実し、授業評価結果の分析及び改善の方策について継続的に協議を重ね、教科主任が各教科会をリードする。 【 A 】2 回の相互授業観察期間を設定し、全員が学習指導案を作成する。 【 A 】少なくとも 1 回は、担当教科以外の教科の授業を観察する。 【 A 】1 年間の研究の成果を研究紀要にまとめる。 	教務 教育研究 各教科
学びの変革が推進され、生徒の意識・行動が変容している	<ul style="list-style-type: none"> 【 A 】教科会を毎週開催し、組織的に主体的な学びを促す授業づくりを推進する。 【 B 】教科主任会議を毎週開催し、教科間の連携を強化する。 【 B 】授業において、目標の確認・振り返りの場面を設定する。 【 A 】定期試験において少なくとも 1 題以上の活用問題を作成し、各教科で協議をし、その結果を教科主任会議で報告する。 	教務 教育研究 各教科
2 自律した行動を取り、他者と協働できる生徒～社会で生き抜くために必要な資質・態度を育成する学校		
自ら進んで挨拶することができる。	<ul style="list-style-type: none"> 【 A 】部活動、生徒会での早朝の挨拶運動を行う。 【 A 】 H R 及び授業の始業終業時の挨拶を徹底する。 【 A 】生徒に日常的に声かけを行う。 	生徒指導
心身の自己管理をすることができる	<ul style="list-style-type: none"> 【 A 】校門指導を継続して行い、年間遅刻回数によって、担任・学年会・生徒指導部による面接を行う。 【 A 】ベルスタートにより授業遅刻をさせない取組を実施する。 【 A 】研修会及び講演会を企画し、生活習慣を改善するための指導を充実する。 	生徒指導
一人一人の生徒に応じた相談体制が確立されている	<ul style="list-style-type: none"> 【 A 】対象の生徒に対しては、スクールカウンセラーや特別支援コーディネーター等複数の教員で組織的に複数回面談を実施する。 【 A 】特別な支援が必要な生徒には、個別の指導計画を作成する。 	保健相談
課外の活動に積極的に参加している	<ul style="list-style-type: none"> 【 A 】部活生徒の活躍の場を校内外に広く設定する。 【 A 】表彰式、壮行式等を充実し、生徒の活躍の周知を行う。 	各クラブ
グローバル社会を視野に入れた行動ができる	<ul style="list-style-type: none"> 【 A 】国際交流のイベント等を積極的に紹介するとともに、留学を奨励する。 【 A 】留学体験者の報告会を実施する。 	教育研究 各教科
3 成長する組織として研修を重ね、地域から信頼される開かれた学校		
教育活動の様子が丁寧に広報されている	<ul style="list-style-type: none"> 【 B 】学校の情報を積極的にホームページに掲載することとし、最新の情報を 1 週間以内に発信する。 	総務
中学生の関心が高く、学びたい学校になっている	<ul style="list-style-type: none"> 【 A 】オープンスクールや個別の学校説明会を実施し、その際の本校生徒の活躍の場を設ける。 【 A 】教職員による学校訪問を実施し、中学校との連携を強化する。 【 A 】部活動や学校行事等について海田町内の小中学校との交流を増加させる。 	教育研究
学校運営に組織的に取り組んでいる	<ul style="list-style-type: none"> 【 B 】各分掌で学校課題に応じた研修を企画し、実施する。 【 B 】業務改善を推進し、教職員のアイデアを聴き、検討する場面を設ける。 【 B 】面談等を通して、学校経営計画の進捗状況を定期的に確認し、各種会議で共有する。 	教務

平成 28 年度自己評価シート(年度末評価まとめ)

校番	13	学校名	海田高等学校	校長氏名	溝上健文	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------	------	------	-------	-----

1 評価結果の分析

(1) 成果

ア 「高い目標に挑戦し、夢の実現をあきらめない生徒～生徒の学力を高め、進路目標の達成を組織的に支援する学校」について
学力が向上し、進路目標を達成している

【第3学年】

3年次の4月と11月の全国模試の平均点偏差値の差は、次の表のとおりで文型・理型とも下げ幅を最も小さくした。昨年度と比べても、文型で1.5,理型で1.8ポイント下げ幅を小さくした。11月時点の偏差値48以上の生徒数は最も多い。また、大学入試センター試験(900点満点)の平均点偏差値についても、最も高かった。

		H28	H27	H26	H25
全国模試	文型	-1.3	-2.8	-4.5	-3.6
	理型	-1.7	-3.5	-2.8	-3.6
	48以上	74	69	61	73
センター試験	文型	47.7	46.1	45.3	47.6
	理型	44.2	42.2	42.0	44.0
国公立大学合格者数		59	62	50	66

【第2学年】

偏差値50以上の生徒数は過去3年で比べて少ないが、受験者数が例年より10名程度少ない中での結果であることから、平均点判偏差値を見ても特段落ち込んだとはいえない。また、偏差値44以下の生徒数が最も少なく、補充指導や追指導の成果が学力の底上げにつながっているといえる。

		H28	H27	H26	H25
全国模試(1月)	50以上	103	108	112	71
	平均点偏差	49.7	50.1	49.9	47.0
	44以下	51	56	62	108

【第1学年】

偏差値50以上の生徒数は最も多く、40以下の生徒は最も少ない。平均点偏差値も高く、これまで試行錯誤してきた初期指導のスタイルが確立され、成果となって表れるようになった。

		H28	H27	H26	H25
全国模試(1月)	50以上	154	150	115	102
	平均点偏差	52.0	51.7	49.8	49.4
	44以下	32	36	61	67

自らが進んで力を付けようとしている

【家政科】

各検定及び三冠王への挑戦者、及び合格者、達成者はともに過去最高で三冠王取得者「日本一」を達成した。これまでの指導の結果、
ことが家政科生徒にと
挑戦し、達成を目指して当然の姿になった。

		H28	H27	H26
食物調理 1級	人数	69(73)	51(58)	56(60)
	取得率	94.5%	87.9%	93.3%
和服 1級	人数	56(72)	49(65)	40(78)
	取得率	77.8%	75.4%	51.3%
洋服 1級	人数	70(77)	59(77)	41(75)
	取得率	90.9%	76.6%	54.7%
三冠王(1級3種目)	人数	53(69)	33(51)	31(42)
	取得率	76.8%	64.7%	73.8%

上段は各検定合格者数()内は受験者。下段は取得率

【第1学年】

学習時間平均は1学期末144分 2学期末139分と若干減少した。また目標値の150分を超えている生徒数は109人で、全体の1/3程度である、120分未満の生徒数は105人で全体の約1/3である。

【第2学年】

学習時間平均は1年次132分 2年次150分と、わずかながら増加している。目標の180分以上を達成している生徒は72名で全体の24%である一方で、未だに2時間以下の生徒も1年次の151名に比べると半減したものの71名いる。

常に資質・能力の向上を図り、授業の工夫・改善を図っている

次の表は、授業観察票に基づく教職員から見た授業の様子を示すもので、4段階評定尺度法で評価している。概ね授業形態の上では、「主体的で対話的で深い学び」を意識した授業づくりが行われていることがうかがえる。また教職員アンケートの結果、肯定的評価の割合は、「私は、「学びの変革」を意識して、授業づくりに取り組んでいる」では79.6%と8割近い教職員が「学びの変革」を意識して授業づくりをしている。

	授業観察の視点	観察された割合	数値
1	本時の目標の明示がある	78.2%	3.86
2	本時の振り返りの場面がある	70.9%	3.41
3	生徒の興味・関心を高める手立てがある	89.1%	3.79
4	努力を要する生徒への手立て(支援)がある	81.8%	3.50
5	基礎・基本を強化する場面(定着)がある	87.3%	3.75
6	教師・生徒間の双方向的な応答の場面がある	98.2%	3.82
7	知識・技能を活用する場面(思考・判断・表現)がある	89.1%	3.83
8	協働的な学習の場面(学び合い、相互評価)がある	85.5%	3.79
9	深い学びに導く手だて(拡がり、探究、応用)がある	78.2%	3.49
10	自律的な学びに導く手だて(家庭学習等)がある	70.9%	3.49
	平均	82.9%	3.67

学びの変革が推進され、生徒の意識・行動が変容している

次の表は、高等学校学力調査における生徒質問紙の結果で、平成28年度において3分の2を越える生徒が肯定的回答を示した結果である。目標には達しないものの、家庭学習時間が昨年度よりも増加するなど行動変容もうかがえる。「4月当初と比べて、主体的に学ぶ生徒が増えたと感じる」について肯定的な回答した教職員の割合は57.4%であった。

質問項目	肯定比率		増減
	H27	H28	
授業では、作業や体験を通して学習した方がよくわかります。	83.1%	88.6%	
答が間違っていたとき、その理由を確かめます。	82.8%	85.6%	
決まりや条件などを理解して使おうとします。	86.9%	84.6%	
複数の情報から必要な情報を選んで使おうとします。	84.1%	84.3%	
授業では、自分の学習進度に合わせて教えてもらった方がよく分かります。	86.0%	83.1%	
勉強は、入学試験や就職試験に関係なくとも大切だと思います。	79.1%	80.3%	
何のために勉強するか、言うことができます。	77.7%	78.5%	
いろいろなアイデアを考えようと思います。	69.9%	75.9%	
勉強は、私のふだんの生活や社会生活の中で役立つと思います。	76.4%	74.5%	
文章などの趣旨や主張を理解して評価(批評)しようと思います。	67.7%	69.4%	
物事を筋道立てて考えようと思います。	67.1%	69.3%	
考えるときには何かに書きながら考えようと思います。	63.2%	67.1%	

イ「自律した行動を取り、他者と協働できる生徒～社会で生き抜くために必要な資質・態度を育成する学校」について

自ら進んで挨拶することができる

「4月当初と比べて、進んであいさつをする生徒の数が増えたと感じる」と回答する教職員の割合は61.1%と過半数は超えている。

心身の自己管理をすることができる

1月末時点の遅刻数は726件と昨年の824件から約100件減少。3年生については143件減少。「4月当初と比べて、生徒の自律性は向上したと感じる」、「4月当初と比べて、生徒の時間を守るという意識は向上したと感じる」について肯定的回答をした教職員の割合はともに75.9%であった。

一人一人の生徒に応じた相談体制が確立されている

スクールカウンセラーによるカウンセリングが15回行われ、のべ24人の生徒、26人の保護者の相談が行われた。カウンセラーによる生徒講演会が計画的に実施され、相談可能な体制にあることの周知は行われている。

課外の活動に積極的に参加している

広島県総合体育大会出場者数はのべ176名。昨年度に比べて64名増加。全国大会出場クラブは、陸上競技部、空手道部、アーチェリー部、マンドリン部であった。全国総合文化祭運営委員として52名が参加し、家庭部門、吹奏楽部、マンドリン部が参加した。その他、中国インターハイに補助員としてサッカー部、バスケットボール部、アーチェリー部、バドミントン部、放送部が参加した。

グローバル社会を視野に入れた行動ができる

高等学校学力調査における生徒質問紙の結果、「将来、留学したい又は海外で働きたいと思います」について肯定的回答をした生徒の割合が32.6%で、昨年度より2.3%増加した。国際交流等の状況調査において、留学したい回答した生徒の割合は52.9%であった。トビタテJAPANに2人応募、未来探究塾に1名参加、海田町海外交流事業に5名参加など行動に表れている。また、JENESYS2016 招へいプログラムにおけるASEAN混成高校生の受入を実施した。今年度は、海外姉妹校である明德女子高校の生徒を迎え入れる年度で、ホストファミリーを募集し、海田西中学校生徒とも交流会を持って、すそ野の広い交流活動を実施した。広島にある2つの世界遺産の案内も生徒に行わせるなど、生徒の主体性に任せた取組に改善した。

ウ「成長する組織として研修を重ね、地域から信頼される開かれた学校」について

教育活動の様子が丁寧に広報されている

中学校や学習塾主催の高校説明への参加し、生徒募集活動を行った。また、年度末には入学予定者に係る中高連携や卒業生の進路状況についての情報提供を行った。普通科においては、選抜()を受検する生徒数が大きく増加し、家政科についても選抜()・()ともに昨年の志願倍率を上回った。

中学生の関心が高く、学びたい学校になっている

年2回行っていたオープンスクールを1回に集約したが、来校中学生数は目標値を上回り、特に保護者同伴の中学生数が増加した。選抜志願状況も良好で「学びたい学校」になっているといえる。

学校運営に組織的に取り組んでいる

教職員アンケートでは「私は、学校経営目標を自覚して、各種業務を遂行している」については90.7%、「私は、教育公務員として自覚を持って不祥事防止を心がけている」については100%であった。

(2) 課題

ア 「高い目標に挑戦し、夢の実現をあきらめない生徒～生徒の学力を高め、進路目標の達成を組織的に支援する学校」について
学力が向上し、進路目標を達成している

【第3学年】

99.6%の生徒がセンター試験を受験し、のべ236名が個別学力試験に出願し、目標達成に向け、最後まで努力する姿勢を示したが、センター試験における5教科受験者は昨年より40名少なく、私立大学等のAO・推薦入試合格や伸び悩む成績故に科目負担を減らそうとした行動が見られた。

【第2学年】

最終模試で、3年ゼロ学期を謳った11月から2月にかけて5教科文型・理型、3教科総合の平均点偏差値については上昇(0.8~1.2)した。中だるみを阻止できたが、伸ばすには至らなかった。例年4月模試で大きく下げているので、年度末・年度初めの対応で下げ幅を小さくする。

【第1学年】

学年比較をした場合は、最も高い学年だが7月、11月、1月とわずかながら下降傾向にある。

自らが進んで力を付けようと努力している

【家政科】

近年の指導の成果として表れた高い実績を海田高校の伝統として継続させていくことが課題である。

【第2学年】

高等学校学力調査における生徒質問紙調査において、「将来の夢や目標を持っています」「自分から進んで勉強します」「ふだんから計画を立てて勉強に取り組みます」「わからない問題でも、あきらめなくてやってみます」の普通科の否定的回答が33.0%、49.8%、71.9%、40.7%と高く、現3年や1年次と比べても高くなっている。

【第1学年】

高等学校学力調査における生徒質問紙調査において、「自分から進んで勉強します」「ふだんから計画を立てて勉強に取り組みます」の普通科の否定的回答が48.7%、66.2%と高い。家庭学習時間が十分に確保されていない。

常に資質・能力の向上を図り、授業の工夫・改善を図っている

教職員にアンケートにも表れているが、1単位時間の授業における振り返りの場面や学んだことの深まり・拡がりに導く手立て、自律的な学習に導く手立てには、依然課題が残されている。指導内容の精選や指導方法の洗練が必要である。

学びの変革が推進され、生徒の意識・行動が変容している

次の表は、高等学校学力調査における生徒質問紙調査において3分の1以上の生徒が否定的回答をした項目の前年比較である。

「ふだんから計画を立てて勉強に取り組みます」「自分から進んで勉強します」の肯定的な回答がそれぞれ30.4%、47.4%と昨年度同様で大きな変化がなく、「主体的な学び」の育ちの部分で課題がある。また、「これまで学習したことの中で、もっと学びたいことがあります」「わからない問題でも、あきらめないでやってみます」の否定的な回答がそれぞれ39.8%、35.4%と3分の1以上の生徒が学びに向かう力が弱く、特に2年生普通科の生徒の結果が芳しくない。

質問項目	肯定比率		増減
	H27	H28	
分からない問題でも、あきらめないでやってみます。	65.1%	64.6%	
授業では少人数で学習した方がよく分かります。	64.8%	62.3%	
どのように勉強してよいかわかりません。	63.6%	62.0%	
授業は、ペア・グループ等で互いに考えを伝え合いながら学習する方がよく分かります。	61.0%	61.7%	
授業では講義よりも自分で課題を解決していく学習の方がよく分かります。	61.6%	61.0%	
これまで学習したことの中で、もっと学びたいことがあります。	64.4%	60.2%	
社会や自然などについての事象の関係を考えようとしています。	56.3%	53.9%	
がんばっても、思うように成績があがりません。	53.3%	52.7%	
自分から進んで勉強します。	45.4%	47.4%	
議論や証明の仕組みを考えて、その良し悪しを判断しようとしています。	45.5%	44.3%	
ふだんから計画を立てて勉強に取り組みます。	30.3%	30.4%	
ある事象がなぜ起こるのか、仮説を立てて検証しようとしています。	35.7%	29.4%	

イ「自律した行動を取り、他者と協働できる生徒～社会で生き抜くために必要な資質・態度を育成する学校」について

自ら進んで挨拶することができる

挨拶に関しては、年度当初に掲げた「いつでも・どこでも・誰に対しても・自分から挨拶することができる」という積極的な挨拶ができる生徒がまだまだ少ないのが現状である。校内で活発な挨拶が飛び交う環境が普通だと思えるくらい浸透させることが必要である。

心身の自己管理をすることができる

遅刻数は、2学期途中で目標としていた500回を超えてしまった。昨年と比較し、特定の生徒が何度も遅刻するケースは少なくなったが、寝坊など本人の不注意による安易な理由での遅刻が多くなっている。また、昨年度と比較しても9時30分以降の遅刻の割合が高くなっており、そこには通院後や体調が落ち着いてからの登校が含まれることから、平素の健康管理や三点固定をした生活など別の観点からの指導も必要である。

一人一人の生徒に応じた相談体制が確立されている

課題を抱えた生徒のすべてが教育相談の対象になっているわけではなく、特別支援を必要とする生徒への対応も十分ではない。整理ができない、相談ができない、他者の感情が理解できないなどにより、学校生活や集団生活への不適應を示す場合が少なくなく、不登校や進路変更に至るケースもある。

課外の活動に積極的に参加している

部活動の加入率が下がり、活動に支障が出ているクラブもある。

グローバル社会を視野に入れた行動ができる

海外姉妹校との交流活動におけるホストファミリーの決定に時間を要した。保護者よりも生徒自身が忌避するという話しも一部の保護者から聞いた。コミュニケーションをとる自信がないということも理由の一つである。受け入れた生徒の話や言葉の壁は杞憂であったことが必ず聞かれる。体験談を周知する取組が課題である。

ウ「成長する組織として研修を重ね、地域から信頼される開かれた学校」

教育活動の様子が丁寧に広報されている

ホームページ更新の即時性に課題がある。「実施後、1週間以内に更新」などのルールづくりが必要である。

中学生の関心が高く、学びたい学校になっている

秋に実施していた学校説明会を取りやめた。入学者選抜の志願倍率を見る限りは影響がなかったと言える。学習塾や中学校主催の説明会や個別対応を充実させるとともに、小学校・中学校との生徒交流、教職員連携の取組を増加させる必要がある。

学校運営に組織的に取り組んでいる

第3回業務改善アンケートによると、肯定的な評価は、「日々の業務の中で充実感を得られている」、「学校経営目標の達成に向けた取組の立案に全ての教職員が参画している」とともに77.6%で、2月に実施した教職員アンケートの自己評価の結果と乖離があ

る。自分自身は参画しているという意識で取り組んでいるが、他者から見たときにはそうではないという解釈もできる格差である。個々の判断基準の違いもあるが、共通認識の形成が課題と言える。

2 今後の改善方策

「学びの変革」3年目の取組を軸に学校運営を行う。「主体的で対話的な深い学び」を推進することで、生徒の自主性、自律性、協働性を高め、ひいては学びに向かう力・人間性を強化し、実社会で通用する人材育成にむけての教育活動を行う。そのためには、教職員は学び続ける者として日々研鑽を積み、授業改善に努める。また、よりよい授業づくり・学校づくりに向け、協働して取り組む組織の形成に引き続き取り組む。このことが、働きがいのある魅力ある学校として、教職員のエンパワーメントを高めることにつながる。生き生きと教職員が生徒に向き合う学校は、生徒からも、保護者からも、地域からも信頼される学校として認知され、支援を受けることが可能になる。こうした学校づくりに向け、各分掌、学年がそれぞれの責務を果たすべく、その使命と目標達成に向け、努力する。

進路指導部

全学年共通して、授業を中心に据え、予習 授業 復習サイクルの定着化を一層図る。また、各種課題や小テストを実施することが、学力につながるよう工夫しなければならない。課題は提出するため、小テストは追試にならないためという後向きな姿勢ではなく、その意義を理解させ、前向きに自発的に取り組み、主体的な学習時間が増えるように指導する。また、全体への課題以外に成績上位層に対しては、別課題などを課すことで上位層の意識を高める工夫をする。学習面で、苦戦している生徒には、学習方法の提示・教材の紹介など、より具体的なアドバイスをする。そして、早期にスタートを切らせるように、全体で指導をする。

教務部

授業の工夫・改善の他に、次のような取り組みによって生徒の知的好奇心を喚起することで、学習意欲の向上につなげていく。

- ・総合的な学習の時間について、社会的な問題をテーマとする内容などを取り入れる。
- ・読書の時間を定期的に設ける。

第1学年

学習習慣確立に向けて、予習・授業・復習、課題や小テスト、模擬試験などに積極的に取り組むよう授業やホームルーム、学年集会などあらゆる場面を捉えての指導を継続していく。担任面談等を通じて、個々の生徒に応じた学習課題や具体的な目標設定および学習計画をサポートしていく。

第2学年

毎日の学習サイクルの定着に向けて、各教科からの予習・復習への働きかけを充実させるとともに、担任面接等を通じて、個々に応じた具体的な目標設定・学習計画作りをサポートする。その際、模試を区切りの目標として取り組めるよう、時期や出題範囲・傾向などの生徒への提示を早め、計画的な模試対策に取り組めるよう各教科と連携する。また、昨年度からの課題である不得意科目の克服に向けて、春期学習セミナーでの質問教室の開設、希望者教科面接の実施・充実等を通じて、生徒への具体的な学習方法や教材の提示を行い、わかる楽しさを実感させるよう取り組む。また、様々な場面で、最後まで諦めず、協力・協働して取り組める生徒の育成をめざし、時間やルールを守る等、仲間作りや基本的な生活習慣を確立させる指導を継続する。

教育研究部

授業評価について、結果を教科主任会で分析し、低かった評価項目（家庭学習・興味関心）の改善に向けて取り組みを継続する。

相互授業観察について、引き続き機会あるごとに相互観察を呼びかけ、授業をお互いに見合う雰囲気醸成し、学びの変革を進めていく。

グローバル人材育成については、公私問わず留学等の案内は、基本的に全て生徒に案内する。順調な姉妹校交流、組織を通じた留学生の受入れの取組を継続し、奨学金付の留学の希望者も増加傾向にあるので取り組みを継続する。

生徒指導部

挨拶・遅刻に関しては、全校集会や日常生活の中で継続的に意識向上に向けた働きかけを全職員で行っていく。部活動に関しては、新入生のオリエンテーションを工夫することが挙げられる。

平成 28 年度学校関係者評価シート(年度末評価)

平成 29 年 3 月 15 日

校番	13	学校名	海田高等学校	校長氏名	溝上 健文	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------	------	-------	-------	-----

評価項目	評価	理 由・意 見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度の実績値を基に、概ね適切に設定されている。 ・学校経営目標に沿った達成目標や行動計画が、実現可能な範囲内において適切に設定されている。 ・目標等の設定は、このレベルまでできるだろうではなく、このレベルまで達して欲しいという努力目標となっているように伺われて良いと思う。 ・前年度の実績を基に、目標・指標・計画等が適切に設定されている。
目標の達成状況の評価の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> ・厳しい評価もあるが、概ね適切に評価されている。 ・データなどを基にして、適切に評価されている。 ・A～Cのランクが、対目標でどの程度であるかが良く分からない項目もあった。 ・合格者数は途中段階であるが、その他の実績値は、目標値に対して適切に評価されている。
目標達成に向けた取組みの適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「学びの変革」を意識した授業づくりが、生徒へ良い影響を与えていることが理解できる。 ・目標達成に向けて、教職員が本気で真摯に取り組んでおり、適切である。 ・取組内容は適切であったように伺える。 ・家政科においては、取組の成果が出ているが、普通科の学力向上については、前年並みとなっている。取組の検証も必要と思います。
評価結果の分析の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> ・数値を基に適切に分析されている。 ・結果について、年次推移などに沿った現状分析がされており、適切である。 ・適切な分析であったように思う。 ・様式 6 において、進路目標については詳細に分析されており、適切である。
今後の改善方策の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な改善策が示されていて適切です。目標達成に向けて努力されることを期待します。 ・分析結果を踏まえた改善方策が明確かつ具体的に示されており、適切である。 ・改善していこうという意思が感じられ、良いと思う。 ・各部・各学年から、適切な改善方策が出されている。志願倍率は高さよりも志願者の質だと思います。グローバル人材育成は、学習や部活に一生懸命取り組む者には難しいと思います。
総合評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・目標値に達成しなかった指標については、目標達成に向けて継続して取り組んでほしい。 ・家政科についてはよく努力されており、三冠王取得者「日本一」という素晴らしい結果を達成されています。しっかり発信してください。 ・実現可能な目標設定、目標達成に向けた教職員と保護者が一体となつての真摯な取組、適切な結果分析と改善方策など、とても適切である。 ・全体的に生徒の成長を考えていることが分かる目標等の設定であり、評価であると思います。継続して頑張ってください。 ・安芸地区のリーダー校として、国公立大学合格者の増加、部活動の活性化、特に野球部・サッカー部等、男子生徒に元気を出してもらいたい。文武両道の学校づくりを。家政科は以前に比べて良くなっています。